

## Shamisen

## A Combination of Sounds

There are various stringed instruments in Japan. The shamisen is believed to have developed from the Chinese instrument, sanxian, which was introduced to the Ryukyu Kingdom, now Okinawa. The shamisen has three silk strings, and a large plectrum or pick called a bachi is used to pluck the strings and beat the skin covering the opening in the body.

ンすることが多くなりました。

ところが

三味線も洋楽器や民族楽器とコラボレーショ

Mr. Kinji Kato, a shamisen artisan, started his career right after graduating from junior high school at the age of 15. His father was also a shamisen artisan.

He opened his own shamisen store "Shamisen Kato" in 1989. Before that, a variety of experiences influenced his present work. He went to night high school while an apprentice to a master shamisen artisan. It took him seven years to graduate, and after that he decided to go on a two-year backpack trip around Japan. During this journey he thought about what is important to him in the future. What he learned is how much he enjoyed meeting people. Kato believes that what he is doing now is an extension of his trip. After he got back home, he returned to his work as an artisan and also entered theatrical entertainment on the side. These experiences gave him the idea to make a stage for the shamisen at his store. Now there is a small space with big windows so that people who walk by can see the work in progress as well as finished shamisen. Kato wanted the older generation to be reminded of the shamisen and the younger generation to become familiar with the shamisen.

Kato created an electric shamisen with a special microphone inside, bringing new life to the instrument. He explains, "Since the 1980s, the shamisen often collaborates with non-Japanese instruments and folk instruments. But the sound of the shamisen is always lost among other instruments." The shamisen has a distinctive sound called sawari which is the resonance from the thickest string lightly touching the neck of the shamisen. The sounds from plucking the strings, beating the taut skin, and the sawari combine to make the shamisen unique. This sensitive sawari sound can become indistinguishable from other instruments in a big auditorium, but the electric shamisen overcomes this obstacle. Now the shamisen is widely known around the world. Not only do Japanese shamisen players go abroad for concerts, but also non-Japanese artists are attracted to the shamisen. Interest in the shamisen is growing globally.

種類や使う人の特徴に合わせて皮を一枚一枚見極 は津軽三味線、 われる三味線はさまざまだ。棹の太さによって細 トリック三味線に に個性と力を授けるのが、 に長唄や小唄など、中棹は民謡、 業。三味線とひと口にいっても、 たのが始まりとされる。 本土にもたらされて琵琶法師たちの琵琶と融合し たな三味線文化を率いてきた風雲児でもある。 )歴史を持つ三味線を今に伝える職人であり、 加藤さんはまた、三味線界に新たな風を吹かせ 中棹、 最大限の力を込めて張り上げていく。 皮張りは、 る。 人だった父を持つ加藤さんは、 一味線は絹弦を撥ではじき、 三味線の皮張り職人としての道を歩き始め 中国の三弦が琉球に伝わって三線となり、 両編成の路面電車が走る東京・荒川区。 風情を残す住宅街の 店を営む加藤金治さんは、 太棹に分けられるが、 三味線の良しあしを決める要の作 義太夫などで使われる。 を生み出したのだ。「80年代頃 専用マイクを内蔵した 加藤さんの仕事だ。 一画に、 さらに皮をたたく 地唄など、太棹 細棹三味線は主 演目によって使 「三味線かとう」 中学卒業と同 400年以上 こうした "エレク 三味線

を超えて広がるコミュニケーションに、 ていくだろう、と。 する瞬間はとても楽しい」と加藤さんは言う。 知らない子どもたちと三味線を懐かしく感じるお 味線はアイデンティティの強い楽器だと思います」。 たちによって、その魅力はさらに伝播していく。「三 各国の人々が三味線にひかれ、 日本の演奏者が各地で演奏するだけでなく、世界 パ、アメリカなど各地に三味線が広がっていった。 れが大きな後押しとなり、 わり」までも艶やかに残すことを可能にした。 楽器との共演でも三味線の真骨頂であるこの があるかないかだ。 ンサートを20年続けた。 ハウス "瞬間 「ちとしゃん亭」と名付けた店舗内での三味線フ 大きな開きがあるこの両者が、 「Chito-Shan」を設立。 が繰り返されれば、 伝統楽器の匠は、 現在は、 東南アジアやヨーロッ 三味線は活性化

一味線と三線との大きな違いは、 わずかに棹に触れさせ、 「さわり」だ。3本の弦のうち、 線の音色を独特で魅惑的なものにしているの ほかの音に消されてしまう」と加藤さん。 甘美で艶めいた特有の音が生まれる。 エレクトリック三味線は、 共鳴音を出させる。こ 彼らに憧れた若者 店舗2階にライ この 一番太い糸だ 国境や世代 「三味線を 一さわり 接近遭遇 他





った手ぬぐいで皮を湿らす



もち米粉を練り接着剤を作る



新

れによって、

皮には猫または犬の皮を使用



最後に三味線特有の「さわり」を調整



胴に接着した皮の折り返しをこきつける



糊を乾かし、一つずつ木センを外す

## [プロフィール]

昭和 22 年、荒川区生まれ。三味線専門店「三味線かとう」取締役。プロ三味線奏者などから絶大な信頼を寄せられている。昭和 37 年、中学校を卒業すると同時に三味線皮張 り専門職人のもとに弟子入りする。4年目から定時制高校に通い、卒業するまでの7年間修業。昭和44年から全国放浪の旅に出て2年後に帰京。旅で得たものは人との出会 いの楽しさ。今やっていることもその延長線上だという。その後皮張り職人のかたわら芝居に傾注。1989年「三味線かとう」を創業。同時に三味線を気軽に楽しんでもらうこ と、店を知ってもらうことを目的に「ちとしゃん亭」と名付けた三味線の無料コンサート開始。20 年続ける。1990 年エレクトリック三味線「夢絃 21」を開発・販売。